

「やなせたかし—アンパンマンの勇氣」 ～やなせたかしから、梯久美子へ～

1. 学年・組 5年東組 35名(204教室)

2. 本单元において目指す子供の姿

本单元の学習にあたって、「筆者は自分の伝えようとするものが伝わるようにエピソードを選び、構成や表現などを工夫しているのだということを踏まえて、教材文と向き合う姿」を目指す。

教材文『やなせたかし—アンパンマンの勇氣』を読むとやなせたかしについて分かった気になる。ただ、慎重に考えれば、同教材文から分かるのは「梯さんの伝えようとしたやなせたかし」である。伝えたい内容が変われば、エピソードも、構成も変わるのだという気付きを通して、伝えようとする内容のためにエピソードが選ばれ、構成や、さらに言えば表現までもが工夫されているのだと考えられるようになってほしい。そして、筆者がそのように書いたのはどうしてかと考えながら学習を進めることで、自分が話したり、書いたりするときに、より自覚的に言葉を使おうとする姿へもつなげていきたい。

3. 本单元において働かせる見方・考え方

標題について、「対象と言葉との関係を、言葉の使われ方に着目して捉え直すこと」とする。

具体的には、何について書かれているのかという学習に終始せず、どのように書かれているのかへと目を向けていくということである。そのことは、これまで説明的文章の単元で特に意識して取り組んできている。伝記を教材とした本单元でも重視したい。

なお、上記の見方・考え方は、書き手、話し手となった時にも活用されるものである。そこで、本单元においては、やなせたかしについての伝記を読み、考える中で、自分はどこからどのように感じたのか伝えようとする場面を設定し、用いるエピソードや表現、構成について、それで本当に聞いている人に伝わるだろうかと考えられる活動を用意し、習熟をはかる。

4. 見方・考え方を働かせるための手立て

何について書かれているのかという学習に終始せず、どのように書かれているのかへと目を向けていくための手立てとして2点用意する。

1. 比べ読み

『やなせたかし—愛と勇氣を子どもたちに』(中野晴行, 2016)について読む時間をとり、交流する。やなせたかしについての、書き手の違う複数の伝記を読むことは、相違点や共通点から、伝えたい内容と書かれ方は繋がっているのだということをとらえやすくし、書かれ方についての気づきや疑問を生むことにつながる。

2. 演劇的手法

筆者(役)へインタビューするという活動を行う。「なぜ、〇〇のエピソードをもっと入れなかったのですか」など、インタビューの形式を借りることで、個人のものであった気づきや疑問を、クラスで共有し考え合えるようにする。インタビューをしてみたり、それを見たりしている中で、書かれ方について考えを深めていけるようになることを考える。

5. 本教材における「子供とつくる学び」

やなせたかしについて梯さんがそのように書いたのはどうしてかと考えながら、何度も再読する中で、例えば「そうか。梯さんは、やなせさんのことをアンパンマンみたいな人なんだと考え、読む人に伝えたいから、そのことを印象付けるために、92歳だった東日本大震災の時に力を奮い起こしたエピソードから書き始めたのか。」と、考えを深めていくことを目指す。

そのために、4に挙げた手立てを用いて学習を行う。比べ読みでは、伝記でえがかれている人物（被伝者）は誰の手によっても同じようにえがかれるわけではないということを出発点として、書かれ方への気づきや疑問を持てるようにし、その気づきや疑問をインタビューする活動で共有し考え合えるようにする。ここで重要なのは気づきや疑問を共有し考え合うことであるから、質問の文言やレベルは重視しない。インタビュー活動をするために教材文を再読したり、インタビュー活動を次々としあったりすることを通して気づきを深めていけるようにする。

なお、子供たちは、前単元の『固有種が教えてくれること（説明的文章）』で、資料を比べたり、インタビューをしたりする活動をもとにして、「筆者の説明の工夫とその効果」について学んでいる。学習内容（伝えたい内容と書かれ方は繋がっている）と方法（手立て）の両面から繋がりを感じられるようにして、国語科の学習として学びを深めていくことも大切にしたい。

6. 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。	文章を読んで理解したことや疑問に思ったことに基づいて、インタビューの質問と回答の形式を活用するなどしながら、自分の考えをまとめている。	積極的に、文章を読んで理解したことや疑問に思ったことに基づいて考えを進め、インタビュー活動に沿って、考えたことを交流しようとしている。

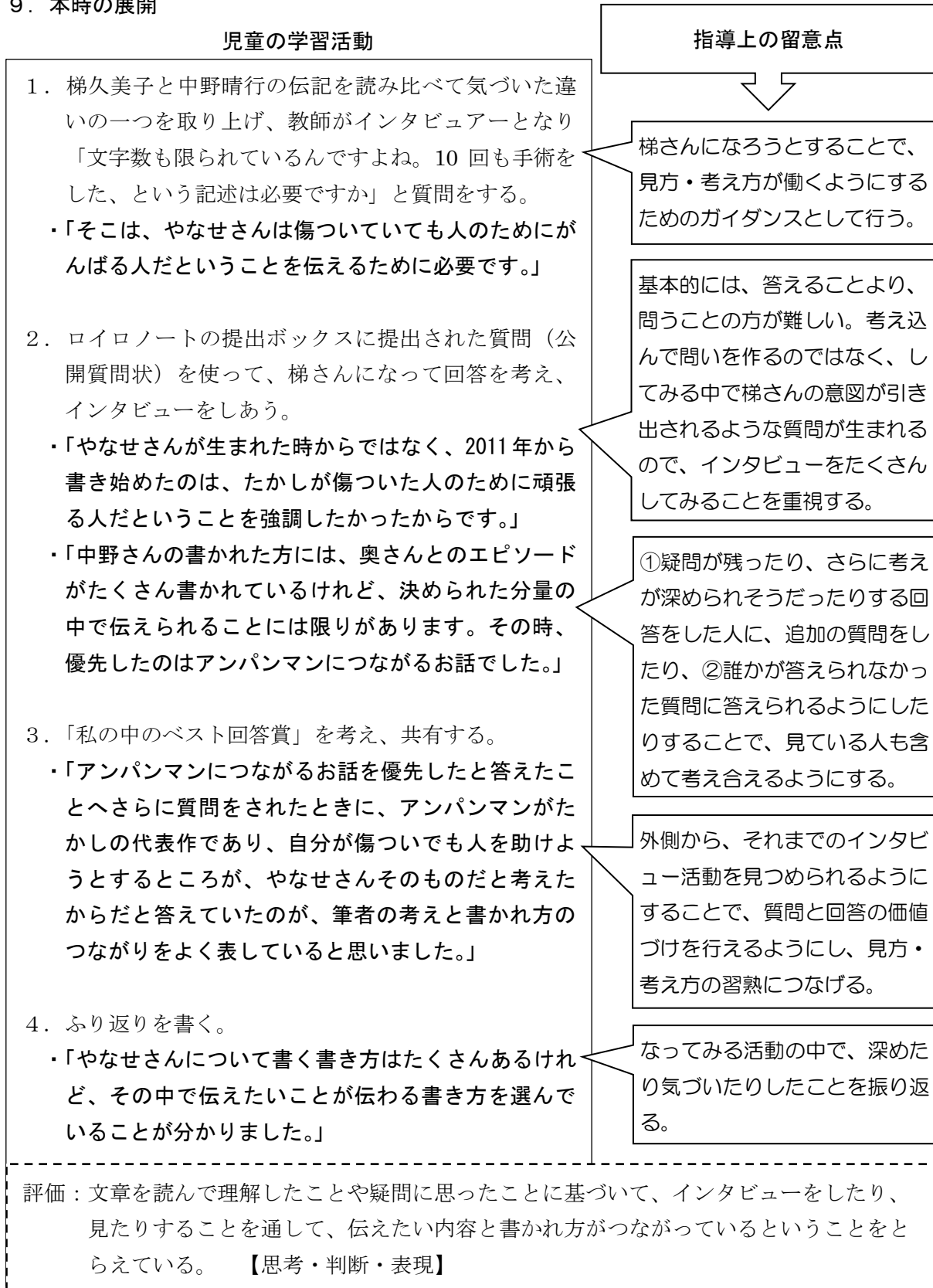
7. 単元計画

次	時	内容
1	1	伝記について知っていることを出し合う。範読を聞き、初発の感想を書く。
2	2	伝記に取り上げられている出来事とその意味について話し合う。
	3	どのような表現で描かれていたか、特徴的な所や気になった所を交流する。
	4	『やなせたかし—愛と勇気を子どもたちに』（中野晴行, 2016）を読む。
	5	中野さんの書いた伝記に取り上げられている出来事について話し合う。
	6	共通点や相違点を意識して、2つの伝記を比べる。
	7	梯さん役へのインタビューをしてみながら、インタビューを考える。
	8	理解したことや疑問に思ったことに基づいて、インタビューをしたり、しているのを見たりしながら、自分の考えをまとめる。★本時
3	9	やなせたかしについての伝記を読み、考えたことや感じたことについて、どこからそう考えたり感じたりしたのかを明確にしながらまとめる。まとめたものについて、ロイロノートを使って共有した後、意見を交流する。
	10	
	11	

8. 本時の目標

・文章を読んで理解したことや疑問に思ったことに基づいて、インタビューをしたり、見たりすることを通して、伝えたい内容と書かれ方(本単元では表現についてというより、特にエピソードの選択や構成について)が繋がっているということをとらえられる。【思考・判断・表現】

9. 本時の展開



10. 指導者の想い

国語科の学びについて「深まる」とはどのような状態をいうのか、見方・考え方という観点から、様々な実践を重ねる中で考えてきた。

そのうちの一つは、「本文を読んで解釈した内容について、本文を根拠に解釈の妥当性を高めている（見方・考え方の活用や習熟）状態」をいうのだと考える。国語科の学習を行ったり、見たりする多くの場合、深まっているかどうかを考えるには、この観点から見取ろうとしていることが多いように感じる。そうしたことの一方、「新しい見方・考え方に立って本文に向き合うようになっている状態」も国語科の学びにおいて深まっている状態であると言えるのではないかと。本単元、本時では、後者について実現できるようにしていきたいと考えている。つまり、本単元、本時の学習で「深まる」とは、解釈の妥当性を高めることではなく、「被伝者が同じであれば、誰が書いても同じようになる」と考えていた子供たちの中にそれまでになかった、筆者の側から伝記を読む（どのように書かれているのか、さらに言えば、なぜそのように書かれたのか）という見方・考え方を獲得するということである。

はじめ、「やなせたかし—アンパンマンの勇気」を読んだとき、児童はやなせさんの生き方や考え方に興味を持ち、自分もそのように生きたいと感想に書いた。35人中30人以上がやなせさんやアンパンマン（書かれている内容）に対する感想であった。授業者が「やなせたかしの伝記を書くと、だれが書いてもこのように書くことになるのかな」と問いかけたところ、「うん。そうだ。」とほとんど全員が答えてもいた。それは、書かれ方へと意識が向かないことの表れでもある。伝記が物語的な要素と説明的な要素からできている（教科書 P.173）ことから考えると、例えば、『ごんぎつね』においてごんについての感想に集中しているとも考えられるが、『すがたを変える大豆』において大豆についての興味や感想に集中している状態とも言える。国語科では物語学習であっても書かれている内容について理解を深めるだけでは、系統的な学びとして繋がってはいかない。説明文学習ではその傾向はさらに顕著である。そこで本単元では、書かれている内容についての興味から学習を始め、次第に書かれ方へと意識が向くようにしていこうと考えた。本時において子供たちへ提示するめあては、「インタビューを通して、梯さんがそのように書いたのはどうしてか考え、書き方の工夫とその思いをとらえる」とする。学習の中では、「自分にとってのやなせさんに対する人物評に照らして妥当であるかどうか」を問題にするのではなく、「やなせさんに対する梯さんの解釈がもとになって書かれているのだから—」という見方・考え方を基にしているということについて重視する。したがって、子供たちの発言を聞き取る際には、「やなせさんは～と考えているから」と話しているのか、「梯さんはやなせさんのことを～と考えているから」と話しているのかを意識して聞き分けていきたい。